

聖霊降臨後第3主日(特定9)説教  
聖マタイ福音書第11章25節～30節  
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

2011/7/3

「疲れたもの、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」  
イエスさまの招きのみ言葉です。約束のみ言葉です。慰めのみ言葉です。

わたしたちの中に、疲れていない者がいるでしょうか。疲れを感じないで、毎日を過ごすことのできる者がいるでしょうか。只単に、肉体的な疲労ばかりではなく、身も心も疲れきって、睡眠を取ろうとしても安眠することもままならない。そんな生活を送っている方もあるかもしれません。自分の毎日の生活は、重荷を背負って押しつぶされそうになりながらも、やっと耐えながら生きているのだと、重荷の大きさ・重さにおののいている方もあるでしょう。涙を流すようなつらい体験、生きることの苦しさから、人生そのものが、重荷以外の何ものでもないと感じ止めざるを得ないような状況に置かれている人もいるかもしれません。

そのようなわたしたちに、イエスさまは呼びかけておられます。「このわたしが、安らぎを与えよう」(岩波訳)と、約束してくださっています。このイエスさまのみ言葉に信頼して、すべてを委ねたいし、委ねることができれば、どんなに幸いなことでしょうか。

しかし、現実を振り返った時に、このみ言葉は果たして信頼に足るものと言えるでしょうか。このみ言葉に従って、イエスさまのもとに行く時に、わたしたちはどのような慰めを与えられるのでしょうか。イエスさまは何故、このようなみ言葉を語ることがおできになれたのでしょうか。

わたしたちは、自分の周りに大きな重荷を抱えて苦しんでいる人がいても、その重荷をどうすることもできないという、悲しい経験をすることがあります。

先日も、ある方と病院に一緒に行きました。癌にかかって1年あまり治療を受けているのですが、幸いなことに抗がん剤が良く効いて、驚くほど良くなってきてはいます。治療の効果が目に見えて現れて来ているので、この際、手術を受けるか、それとも現在の治

療を継続するか、セカンド・オピニオンを求めて専門の医師の意見を尋ねるために、別の病院に付き添って行きました。

現在の医学のレベルでは、難しい判断を迫られる病状であったようです。結局、医師の見解は2つに分かれて、どちらを選択するか、自分で選ばなければならないことになりました。自分ではどうして良いか分からないから、専門家の先生に尋ねたにも拘わらず、異なる回答が返って来たわけです。同じ意見なら、それに従えば、まあまあ安心することができますが、相反する答えでは、どちらを選ぶか、判断に苦しむことになりました。自分の運命を決めるためにボールを投げてみたのが、そのボールが再び手元に返って来てしまったのです。命に関わる肉体の病気という重荷に加えて、その命を左右することになる重大な決断を、自分自身で下さなければならないという、更なる重荷を抱えることになりました。負わせられることになりました。それによってどのような結果が生じようとも、自分の責任として受け止めなければならないのです。選んだ道が良い結果になれば、それは正しい選択ができたと喜べるのですが、期待した結果とは大きな隔たりが生じるようなことになったら、後で悔やんでも悔やみきれないことになります。悩みは深いものがあると言わねばなりません。

皆さんも経験がおありでしょうが、このような場合、相談を受けてもどちらを選んだら良いか、軽々に答えることはできません。ましてや、ご本人の心の奥深くの苦悩に対して、そこにまで届く言葉をかけることなどは、到底、できないのです。慰めようにも言葉がないのです。見つからないのです。苦しみの中にある人に対して、いかに自分が無力であるか、いやというほど知らされるのです。期待されても、重荷を担っている人の力になってあげることにはできません。支えて上げることもできません。できることがあるとすれば、ただ、その人の傍らに居続けることと、そして、心の中で祈ることだけなのです。

イエスさまは、このようなわたしたちの限界をご承知の上で、「重すぎる荷を背負っている者はみな、わたしのもとに来なさい。そうしたらわたしはあなたたちを休ませよう。安らぎを与えよう」と、敢えて仰るのです。これは、驚くべきみ言葉です。人間が口にすること

のできない言葉です。人間には不可能な言葉です。仮に口にしたら、傲慢のそしりを免れないでしょう。

イエスさまは、どのようにしてわたしたちに休みを与えてくださるのでしょうか。イエスさまの下さる休息とは、どのようなものなのでしょうか。

重荷を負って喘いでいる人を助ける道は2つあるでしょう。その1つは、重荷そのものをその人から取り去ることです。そうすれば、それまで重荷に打ちひしがれていた人は解放されて、その後は重荷に悩まされることはないでしょう。しかし、わたしたちの人生には重荷を負わずに避けて通れるということが、果たして可能でしょうか。仮に1つの重荷が取り除かれたとしても、次から次へと新たな重荷を背負い込むことになるというのが、わたしたちの実感ではないでしょうか。この地上の歩みを続ける限り、重荷を一切、担うことなく、身軽に歩んで行くことなどは不可能だと言わなければなりません。イエスさまは、「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われましたが(16:24)、一人一人に負わされる十字架は、決して軽いものではありません。それが神さまからの使命であったとしても、到底担いきれない重荷として、目の前に現れてくるのです。

重荷が取り除かれることがないとしたなら、人の人生はどのようにして救われるのでしょうか。それは与えられた重荷に支配され、振り回されている自分から解放されて、自分を取り戻すことによってです。重荷が重荷と感じられるのは、それによって押しつぶされそうになるからです。重圧から逃れられないと感じるからです。

そうではなくて、喜んで重荷を担って行こうという気持ちになることができれば、或いは苦勞をものともせず働くことができるならば、重荷は重荷ではなくなるし、苦勞も心地よいものとなるのではないのでしょうか。

イエスさまが約束してくださっている休み、休息というのは、わたしたちを生き生きとしたものにしてくださる安息です。新鮮な命の力を与え、立ち上がって活動に向かわしめる原動力を与える安らぎです。リフレッシュされて元気を回復する休みです。安らかな心で重荷を負う力を養う休息です。

そのために、イエスさまは「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」と仰りました。

軛というのは、ご承知の通り2頭の動物を1組に繋ぐための木製の道具です。預言者エリシャがエリヤに召し出された時、12軛の牛を操って畑を耕していたとありますから(列王記上19:19)、エリシャは巧みな牛使いだったのでしょう。軛に繋いで牛を思うままにコントロールしたのです。その軛に繋がれる、イエスさまの軛に繋がれることが、安らぎを見いだすことだと言うのです。イエスさまの支配に服した時に、安らぎに憩うことができます。

軛という道具は、動物が働かされる時に首に懸けられます。一日の仕事が終わって、ご苦労様と言って軛を外して、動物もそこで初めて餌にありついて休むことが許されます。しかし、イエスさまは、軛を外して休息を取りなさいとは言われませんでした。その逆です。「わたしの軛を負うことが安らぎを見いだす道だ」と指摘されるのです。

軛自体、ある見方をすれば重荷です。使徒言行録によれば、エルサレムで使徒会議が行なわれた際に、ファリサイ派出身の人たちは、「信仰に入った異邦人も、割礼を受けて律法を守らなければ救われない」と主張しました。それに対して、ペトロは、「先祖もわたしたちも負いきれなかった軛を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのか」と言って反論しました(15:10)。律法が背負いきれない軛、重荷であると理解されています。

軛は、他の重荷の上に更に増し加えられる重荷です。しかし、イエスさまの軛は、それによって他の重荷を元気よく担って行けるような働きをします。それがあれば、重い荷物を引っ張って行くことができ、尚かつ、それのお陰で傷を負うこともなく、痛みや苦痛を感じることなく重荷を負うことができます。

その軛を負うことは、イエスさまから学ぶことによって、わたしたちの現実となることが約束されています。イエスさまから学ぶ、それはイエスさまの弟子となることです。イエスさまの生き方を、わたしたちも同じように生きることによってです。それは、柔和と謙遜に生きることです。

柔和と謙遜は、只単に道徳的な、倫理上の徳目として言われているわけではありません。イエスさまの御心そのものです。イエスさまの生き方、あり方そのものです。言い換えれば、神さまのみ恵みが、イエスさまの柔和と謙遜の中に映し出されているのです。人間の苦悩をそのまま捨て置くことに忍びず、神さまがご自分を低くし、自ら重荷を負って苦しみに耐えてくださる姿が、イエスさまの柔和と謙遜にほかなりません。神さまの慈しみが、そこに溢れ出るのです。

わたしたちも、その神さまの憐れみに信頼を寄せ、自分の可能性に頼るのではなく、己を空しくして、イエスさまに倣うとき、イエスさまの柔和と謙遜に学ぶとき、わたしたちは変えられます。重荷を負いつつも、それに振り回されることも支配されることもなく、安息のうちに、「祝福された静けさ」(詳訳聖書)にあって憩うことが赦されるようになるのです。

イエスさまの軛に繋がれて、リフレッシュされて毎日の生活を送って参りたいと思います。